



ILLUMINANCE

RINKO KAWAUCHI

あらゆる境界を超えて結びついていくイメージ

和田京子=文 Text: Kyoko Wada

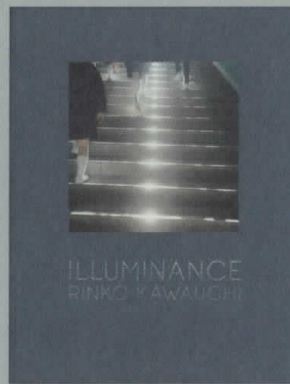
いささか個人的な話で始める。川内倫子に初めて会ったのは、彼女が「ひとつぼ展」でグランプリを受賞して間もない時期だった。彼女のバイオグラフィを見ると、受賞が1997年と記されているので、かれこれ15年ほど前になるだろうか。わたしはある美術系出版社の編集で、当時、「ひとつぼ展」の審査員を務めていた浅葉克己事務所のデザイナを介して、彼女のポートフォリオを観る機会を得た。確か、ファイナルは3冊あった。学生時代に35ミリで撮りためたもの、モノクロームの女性のポートレート、そして彼女の作品を印象づける浅いピントで淡いプリントの6×6の画角で撮られた写真のファイルだった。そのどれもが生々しく、思いがけずスツと紙で指先を切ってしまったかのような後味だった。ふと気づくと、とくとくと傷口から深紅のなま温かい血が吹き出

てくるような感触が、いまなお思い出される。当時は、週に写真家2、3人の持ち込みのポートフォリオを観ていたが、申し訳ないが正直に言つと、多くの方は記憶の外にある。ここまで克明に覚えていた作家は、数年のうち川内倫子のほか、ほとんどいない。そして「Illuminance」を手にしたとき、かつて感じた古傷が、ふたたび

び疼いた。そこには、あのときと変わらぬ一種の凶器があった。「Illuminance」は、川内がここ15年ほどの間で撮影してきた写真を収録している。ちょうど初めてポートフォリオを観た時期から現在までの写真が収録されていることになる。あのときに見た写真が含まれているかいないか、それは定かではない。しかし、それはさして問題ではない

ものと思えてならない。ふたたび写真集を手にする。表紙はグレーともブルーとも言えないあまいな中間色のクロス張り、タイトルと名前は観る角度によって変化するホログラムの箔押しで記されている。少々、専門的な話になってしまいが、これだけ細かいドットのホログラムも箔押しも、技術的には相当苦労したのではないかと推測する。しかし、タイトルはこの技法にしなければならなかったのだろう。もともと川内は、タイトルを「Presence（玉虫色）」と考えていたという。最終的には版元のApture Foundationの編集者と相談して、現在のものに決定したそうだが、玉虫色に光る、不安定ではかないタイポグラフィは、始まろうとする物語の序章なのだろう。

写真集は、皆既日食の写真ではじまっている。ここまではっきりとした間の黒は、川内のこれまでのイメージを一新するものだ。しかし、この真昼の闇がまた、これからはじまろうとしている白昼夢の幕開けを告げているのだ。ページがすべて袋綴じされているのには理由がある。作品のコンセプトとして「すべてがつながっている」ことがあり、当初は全ページが蛇腹式に連続した製本も構想したそうだが、これだけのポリウレームの



FOIL ¥4,515

ページ数を蛇腹式に製本することは現実的ではない。そこで袋綴じを採用し、「切れ目ない」体裁を保つことにしたという。写真集の構成は、すべて川内自身が行っている。一点一点の写真同様に、その構成には彼女の指紋がしかと見てとれる。川内の写真集について、既によく言われていることだが、この写真集においても見開きで対となったイメージの組み合わせ、シークエンスが見せるその流れと澱みに、イメージの行間でも言うのか、その狭間に世界が広がっていく。以前、カルティエ現代美術財団館長のエルベ・シャンデス氏に「1と1を足して3になる写真だ」と言われたそうだが、まさに3つ目のイメージが行間を埋め、「すべてがつながって」いく。個々の写真はイメージの断片には違いないが、川内によって結び留められたイメージは、写真集となって一つの全体像として現れる。そしてイメージのつながりは写真集に留まることなく、観る者の記憶と心象と感情とへ連鎖していき、「すべてがつながって」いくのである。

だろ。どの写真がいつ、どこで撮られたということよりも、すべてのイメージが時間と空間を、それがどこで見た覚えのある日常風景であろうとなかろうと、あらゆる境界や輪郭や意味を軽々と超えて到達してしまつた奇跡の像がそこに連なっているからだ。この写真集は、15年という月日での変遷や経験を経ても、なお変わらぬ川内の髓が結晶化した

ものと思えてならない。ふたたび写真集を手にする。表紙はグレーともブルーとも言えないあまいな中間色のクロス張り、タイトルと名前は観る角度によって変化するホログラムの箔押しで記されている。少々、専門的な話になってしまいが、これだけ細かいドットのホログラムも箔押しも、技術的には相当苦労したのではないかと推測する。しかし、タイトルはこの技法にしなければならなかったのだろう。もともと川内は、タイトルを「Presence（玉虫色）」と考えていたという。最終的には版元のApture Foundationの編集者と相談して、現在のものに決定したそうだが、玉虫色に光る、不安定ではかないタイポグラフィは、始まろうとする物語の序章なのだろう。

写真集は、皆既日食の写真ではじまっている。ここまではっきりとした間の黒は、川内のこれまでのイメージを一新するものだ。しかし、この真昼の闇がまた、これからはじまろうとしている白昼夢の幕開けを告げているのだ。ページがすべて袋綴じされているのには理由がある。作品のコンセプトとして「すべてがつながっている」ことがあり、当初は全ページが蛇腹式に連続した製本も構想したそうだが、これだけのポリウレームの

Rinko Kawauchi
1972年、滋賀県生まれ、東京在住。
2002年、「うたたね」『花火』（共に2001年刊）で第27回木村伊兵衛写真賞を受賞。2009年に第25回インフィニティ賞芸術部門受賞。本書は世界5カ国で同時出版された。2012年5月12日～7月16日まで新作を含めた個展「照度 あめつち 影を見る」を東京都写真美術館で開催。